

もくじ

▽新年のご挨拶	1-2
▽若い人にとっての生理人類学	2-3
▽第70回大会（福岡市）ご案内	3-4
▽研究室紹介（山梨県環境科学研究所）	4-5
▽国際学会のご案内	5-6
▽関東地区研究奨励発表会報告	6
▽第69回学会大会優秀発表賞	6-8
▽学会動静	8
▽from Editors	8

【新年のご挨拶】

日本生理人類学会々長
勝浦哲夫（千葉大学）

会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も皆様にとって良い年になりますことを心より願っております。

昨年は、6月8-9日に金沢大学で藤原勝夫大会長の下で第68回大会が開催されました。特別講演「脊椎動物の平衡制御、原理と盲点」では高橋正紘先生による大変興味深いお話を伺うことができました。人類学関連学会協議会合同シンポジウム「人間の姿勢とロコモーション様式の特徴（司会：藤原勝夫先生）」では、人類学の他の領域からのご講演も拝聴でき、人類学の幅の広さを改めて感じ入った次第です。この他、シンポジウム「脳活動の活性化（座長：国田賢治先生）」も生理人類学にとって最重要テーマの一つであり、新進気鋭の研究者から最新の研究成果を伺うことができました。一般講演も77題と多く、盛会となりましたことをお世話戴きました藤原大会長始め、実行委員の先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。

10月26-27日には、同志社大学で福岡義之大会長の下で第69回大会が開催されました。柴田智広先生による特別講演「適応的なロボットによるヒトの運動学習や生活機能の支援」では介護支援ロボット研究についての最先端のお話を伺う

ことができました。本大会でも2つのシンポジウム「ヒトの随意運動制御メカニズムの解明（座長：青木朋子先生）」、「神経・筋の可塑性とリハビリテーション・スポーツ（中澤公孝先生）」があり、それぞれ大変興味深いご講演でした。60題を超える一般演題も含め、本学会の特徴であるフロアからの多くの質問、熱いディスカッションが行われた。行き届いた大会運営をされた福岡大会長始め、実行委員の先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。

また、8月8-10日にカナダのバンフで日本生理人類学会と関連の深い国際生理人類学会議（ICPA2013）がDouglas E. Crews 会議長の下で開催されたことも意義深いことでした。カナディアンロッキーの景勝地であるバンフは天候にも恵まれ、素晴らしい大会になりました。1演題に30分程の時間があるゆったりとした進行で、議論が十分に出来たことも幸いでした。

昨年9月2-3日には、中村晴信先生のお世話で2回目となる夏期セミナーが京都で開催され各大学から多数の学生が参加し、盛り沢山の企画が行われました。夕食後の懇親会も盛り上がり、若手の交流という意味でも有意義なセミナーでした。今年は9月4-5日に開催されます。益々盛り上がることを願っています。

昨年は英文誌 JPA のインパクトファクターが初めて公開されたことも学会にとって意義深い

ことでした。今後、この数値をあげるように会員皆様のご協力をお願い申し上げます。

さて、本年は6月21-22日に第70回大会が九州大学の綿貫茂喜大会長の下で、また11月1-2日には第71回大会が神戸大学の中村晴信大会長の下で開催されます。それぞれの大会長のご尽力により素晴らしい大会になるものと期待しています。

来年春には、本学会編としては2冊目となる「人間科学の百科事典」が丸善より出版される予定です。現在、会員の皆様に編集、執筆で大変なご苦勞をお掛け致しておりますが、原稿もほぼ出揃い、素晴らしい書籍になりそうです。

この他、海外での合同シンポジウムの計画が複数進行しており、生理人類学の海外へ展開が積極的に行われる予定です。また、来年3月には科研費・研究成果公開促進費(C)による国際シンポジウムが古賀俊策先生のお世話で神戸で開催され、来年10月開催の国際生理人類学会議(ICPA2015)の準備も本格的に行われるものと思います。

本学会が会員皆様のお役に立てるようにしていきたいと思っております。皆様のご協力ご支援を本年も宜しくお願い申し上げます。

【若い人にとっての生理人類学】

安河内朗(九州大学)

1971年の浪人時代、よど号事件、浅間山荘事件などがあったが、学生運動はピークを過ぎていた。そういった時代、1972年に九州芸術工科大学に入学。夢はカーデザイナー。しかしその後夢は転々とし、3年の春休みには進路に迷った。友人、先輩、また何人かの先生に相談したあげく最後に佐藤方彦先生のドアをノックした。突然の訪問にもかかわらず快くご対応頂き、目から鱗のような感じで人間工学に決定。当時、“人間工学”という名称はまだ世の中で知られてなくて、人に「人間工学って何するって?」と聞かれても「なんか知らんけど、フランスベッドで言ようが」という具合。この時代、唯一フランスベッドがこの用語を使っていた。まっ、こんな感じで人間工学教室に入った。同僚には、原田君、山崎君、津田君の3名。津田君は現在、歯医者。私も含めて他の2名は、よくわからないままいつの間にか研究者の道へ。佐藤先生にうまく誘い込まれ

たような感じ。この当時、生理人類学という言葉はほとんど聞かず、学会といえば日本人類学会、日本人間工学会、人類働態学会、日本生気象学会で、特に人類学会での発表はその緊張感と恐怖のあまり心臓が口から出るほどの思いだった。

学生である私は、“研究は人の役に立つべきもの”と気負っていたが、佐藤先生には人の役に立たない研究をしなさいとさりりとわれ、何のことやらその真意がつかめない状態であった。当時の教室メンバーは少なく、後輩、同僚、先輩と一緒に実験をしたり、学会の準備を徹夜でしたりと結構楽しくやっていた。しかし実験はじつに過酷で、高圧低圧、高温低温の各条件で、種々の生体機能を測定したものであった。中枢神経系、自律神経系、運動系、内分泌系について当時のあらゆる測定手法を、自分の意志とは関係なく知らず知らずのうちに覚えていくことになった。例えば先生から、今度”ILメータ“が入ったので君は血液ガスをやりなさい、といった具合。そのために急遽、酸一塩基平衡の本を調べて研究企画を立てることになる。そんなこんなで当時は何をやっているのかよく理解できないまま時間が経つうちに、生体システムの全体像のようなものが何となくそれなりにイメージできてきた。それも抄読会や厳しい談話会などでのトレーニングがよかった。特に談話会では1時間の話題提供を担当する。順番がくる3ヶ月ほど前から入念に準備しながらも、発表当日はこてんこてんに佐藤先生に突っ込まれる始末で、学生たちは涙ながらもその無性な悔しさが次の糧になっていった。

専攻科、修士、研究生を経て運良く助手になった頃、立場上佐藤先生とお話できるチャンスが増え、時には先生のお宅で深夜までお酒を頂くこともあった。そんな会話を通して、人間工学会や人類働態学会、あるいはその他の関連学会は生理人類学の道に至る道程であったのだろうか、ということがわかってきた。ちょうど富士山の麓を迷いながらもとにかく上に向けて進む中で、やがて生理人類学という頂きに集約されていくような感じではないだろうか。しかし、それを言葉で理解したり、説明したりすることは難儀である。生理人類学とは、常にその根幹を問いながら、いろんな知識を得、様々な考えや行動を経ていくうちに暗黙知として次第にカラダに染み込んでいくもののようなのだ。1990年6月、当時の産業

医学総合研究所から芸工大に戻る幸運を得、その後佐藤先生とは毎日お昼をともにさせて頂く中で、私にとっては生理人類学というよりもマサヒコロジー？というようなものが染み込み、私の中で消化不良ながらも何やら化学反応をおこしていったのではなかろうか。1990年代は生理人類学の実社会への貢献ということで、東京で年4回のペースで企業対象のセミナーを開催したり、情報交換会をするという新しい経験をつむ傍ら、多くの合宿を経て「生理人類学」というものを皆で考えたことも、私の生理人類学のブラッシュアップになったように思う。特に今思い出すのは、千葉房総の大多喜での合宿である。当時、世間では脳死判定や臓器移植の倫理問題が話題となっていたが、生理人類学者は話題が何であろうと生理人類学的観点から明確にものを言えなくてはならない、という佐藤方彦先生のお話が印象に残る。そのためには、自分なりの生理人類学的哲学を築いていかなければならない。

若い人にとって、「生理人類学」とは教えられるものではなく、さまざまな知識や経験を経つつ常に自分で試行錯誤していくなかで創りあげられるものだと思う。時間はかかり終点のない学問だが、しかし努力すれば自分のなかでその変化は感じとれるはずである。生理人類学という人類そのもののサイエンスとして、終わりのない目標に向けて若い方々はチャレンジしていただきたい。いや、われわれもシニア型チャレンジをする。なぜなら、面白いから。

【第70回大会（福岡）のご案内】

綿貫茂喜（九州大学）

第70回大会を、下記の会期・会場にて開催いたします。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

本大会では特別講演と2つのシンポジウム、一般公演、ポスターセッションを企画いたしました。本大会が開催される九州大学大学院芸術工学研究院・教授の板橋義三先生に「日本語の源流と形成」と題したご講演をいただきます。また、2つのシンポジウムのうち1つは「“集団”を科学する～若手研究者が考える未来～」をテーマとして、本学会と関連学会の若手研究者にご講演いただきます。もう1つのシンポジウムは「生体機能のバリエーション」をテーマとして本

学会を代表する4名の先生方にご講演頂く予定です。

詳細につきましては、今後学会ホームページにて随時お知らせいたします。会員の皆様と九州大学大橋キャンパスでお目にかかれることを心より楽しみにいたしております。ぜひ、ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

1) 会期 2014年6月21日（土）、22日（日）
2) 会場 九州大学大橋キャンパス 〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

*地図等は学会HPにてご確認ください。

3) プログラム概要（予定）

・理事会・若手の会（6/20）

・一般公演（6/21）

・ポスターセッション（6/21、22）

*ポスターの掲示サイズはA0（1189mm×841mm）縦長を予定しております。

・評議員会（6/22）

・懇親会（6/21）

・総会（6/22）

・関連会議（6/22）

・特別講演（6/21）

演題「日本語の源流と形成」

九州大学大学院芸術工学研究院 板橋義三先生

・シンポジウムⅠ（6/21）

テーマ「“集団”を科学する～若手研究者が考える未来～」

シンポジスト（敬称略）

大谷洋介（京都大・霊長類研究所）

中山一大（自治医大・分子病態治療研究センター）

縄田健吾（京都文教大学）

西村貴孝（長崎大学）

シンポジウムⅡ（6/22）

テーマ「生体機能のバリエーション」

シンポジスト（敬称略）

井上芳光（大阪国際大学）

菊池吉晃（首都大学東京）

北村真吾（国立精神・神経医療研究センター）

小林宏光（石川県立看護大学）

4) 参加・発表申込み等の日程・方法

・演題締め切り 2014年4月25日（金）

・抄録提出締め切り 2014年5月23日（金）

*参加申込、発表申込の詳細を学会ホームページに掲載しておりますので、ご確認ください。

5) 大会参加費・懇親会費

■大会参加費

- ・5月23日(金)以前の振込
正会員 7,000円, 非会員 10,000円
学生(正会員/学生会員) 3,000円 学生(非会員) 4,000円
- ・5月24日(土)以後の振込
正会員 8,000円, 非会員 10,000円
学生(会員) 4,000円 学生(非会員) 5,000円

■懇親会費

- ・正会員 3,000円, 非会員 4,000円
学生(会員/非会員) 1,000円

■振込先

- ・郵便局からの振込
日本生理人類学会第70回大会事務局
01720-2-139022
 - ・他の金融機関からの振込
ゆうちょ銀行 店名:一七九店(イチナナキューウ店)
預金種目:当座 口座番号:139022
口座名義:ニホンセイリジンルイガツカイダイ
70カイトイカイジムキョク
- 6) 〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1
九州大学大学院芸術工学研究院
日本生理人類学会第70回大会事務局
E-mail: jspa70@design.kyushu-u.ac.jp
Tel & Fax: 092-553-4543

【研究室紹介】

堀内雅弘(山梨県環境科学研究所)

ようやく得た北海道の地方私立大学でのパーマネントポジションを無謀にも退職して渡米、帰国と紆余曲折の末、2012年4月、山梨県環境科学研究所・環境健康研究部・環境生理学研究室に研究員として着任しました。恥ずかしながら着任した当の本人ですら、応募するまで研究所の詳細を知りませんでした。まず簡単に研究所の紹介をしたいと思います。名前から想像できますように公立、つまり山梨県の研究機関です(なぜか、県立~という名称にはならなかったそうです)。1997年に山梨県富士吉田市郊外の標高1065mの場所に設置されました。研究所は、富士五湖の一つである河口湖から富士山に向けて、車で15分ほど、富士山五合目に向かうスバルライン直下であり、まさに日本有数の観光名所、富士山麓にあります。初代所長は体温調節

機能の研究では、ご存じの方も多い非常に著名な入来正躬先生であります。



写真1. 環境生理学研究室での実験風景

私が所属している環境生理学研究室は、現在では研究員が私1名と助手1名という非常に小さな所帯ですが、前述のように環境健康研究部という環境と人の健康の関わりを中心に研究する部署の一端を担っています。環境生理学研究室以外には、生気象学研究室と環境生化学研究室があり、それぞれ研究員が2名ずつ、助手が1名ずつ在籍しています。環境生化学研究室では細胞から動物まで、生気象学研究室では動物からヒトまで、そして環境生理学研究室では主にヒトを対象にした研究を行っており、かつ互いに共同研究も行っており、幅広い視点から、そしてマクロからミクロまで研究ができる環境にあると思っています。敢えて難点を挙げるとすれば、県の機関ということもあり、行政のニーズ、行政からの委託は研究課題を設定する際にも、非常に優先順位が高い、ということでしょうか。このような背景から私の研究室では現在は主に二つの研究課題に取り組んでいます。一つは、県有林課からの委託である「森林の癒し機能」に関する研究、もう一つは県の重点課題である「急性高山病の要因解明」に関する研究です。まったく異なる二つのテーマにも感じますが、いずれも「森林」あるいは「高所」という二つの環境に対する生理反応(血圧反応、ストレス改善、および脳循環応答)の実験研究であります。特に、後者は本年度より開始したばかりで、実験設備等の関係で山梨大学との共同研究で行っております(写真1)。「環境生理」という私にとってこれまであまり馴染みのなかった言葉ですが、自分の元々のバックグラウンドである「運動生理学」の知識や技術を十分に生かし、

研究設備や研究体制もようやく軌道に乗ってきたところで、現在では充実した研究三昧の日々を送っています。



写真 2. 研究所内での測定風景

皆様ご存じのように、本年、富士山が世界文化遺産に登録されました。実は、当研究所もこれを受けて、2014年4月より「富士山科学研究所」に改名予定です。文字通り、富士山(高所)を中心とした、喫緊の課題に向けて研究を行っていくこととなります。つまり、前述の「森林の癒し機能」に関する研究等に加え、高所という環境に適応できるメカニズムの解明から、急性高山病を未然に防ぎ、県民に還元していく、ということが求められてきます。いわゆる地元ということもあり、私自身は昨年、今年と富士山山頂の測候所に滞在し、自ら高山病になりながら、前述の山梨大の学生達と実験も行ってきました。

当研究所では小さな所帯ではありますが、これまで述べてきたような研究内容に興味がある大学の先生方との共同研究や、学振研究員の方の受け入れなどは常に門戸を開いておりますので、ご興味のある方は是非一緒に研究ができれば幸いです。

【国際学会のご案内】

李 スミン (千葉大学)

第1回アジア人間工学デザイン会議(第1回 Asian Conference on Ergonomics and Design; ACED)が韓国済州島で開催されます。日本生理人類学会と大韓人間工学会のジョイントシンポジウムが企画されており、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

<<http://www.aced2014.org/index.php>>

<会議概要>

運営委員会：ACED 2014 Korea Organizing Committee

議長：Sung H. Han (POSTECH, South Korea)

日時：2014年5月21日(水)～24日(土)

会場：Ramada Plaza Hotel, Jeju, Korea

<<https://www.ramadajeju.co.kr/ENG/>>

セッションのテーマ(予定)：

Affective Engineering & Design,
Anthropometry, Aviation Ergonomics,
Biomechanics, Cognitive Ergonomics,
Collaborative / Team Work, Design
Information & Knowledge, Digital Human
Modeling, Digital Learning / Training,
Ergonomics and Apparel, Ergonomics in
Complex Systems, Ergonomics in Health Care,
Ergonomics in Manufacturing, Human
Behavior in Systems, Human-Computer
Interaction, Interaction / Interface Design,
Macroergonomics, Occupational Health &
Safety, Product Design, Regional Ergonomics
Issues, Sustainable Design, Usability
Engineering, User Experience, User Interface,
Vehicle / Transportation Systems, Virtual
Environments

<登録、登録費用など>

○Abstract 締切：2014年2月15日まで

○事前登録(2014年3月31日まで)：一般400ドル、学生200ドル、同伴者宴会追加50ドル、2014年4月1日から：一般500ドル、学生250ドル、同伴者宴会追加50ドル

上の金額には宴会、市内ツアー料金が含まれています。

*上記の金額は日本からの登録に限り一般100ドル、学生50ドルの割引が適用されたものです。支払い方はサイトを参考にしてください。

<済州島>

済州島はハンラ山国立公園がある韓国の南端に位置するリゾートの町です。韓国半島の西南に位置し、韓国最大の火山の島である済州島は、漢拏山を中心に緩やかな傾斜になっており、東西73km、南北31kmの楕円形をしています。南の島である済州島は、気候が暖かく冬でも氷点下になることがほとんどありません。なお、済州島は韓国半島と異なる独特な海洋文化と自然の美

しから、ユネスコ世界自然遺産にも登録されています。島の中では多数のホテル、ゴルフ場やカジノなどの観光・娯楽施設が多数あるほか、海産物なども豊富なため、韓国国内のみならず、日本などからも多くの観光客が訪れています。

＜会場：Ramada Plaza Hotel, Jeju＞

＜交通＞

濟州島へは成田国際空港から濟州国際空港までの直行便があります。なお、濟州国際空港から会場まではタクシー利用が便利です。タクシー利用の場合、空港から会場までは3.8キロ離れており、約10分程度かかります。

＜お問い合わせ＞

李 スミン(千葉大学環境健康フィールド科学センター), yisoomin@chiba-u.jp

【研究奨励発表会（関東地区）開催報告】

石橋圭太（千葉大学）

年末恒例行事となりました、日本生理人類学会研究奨励発表会（関東地区）が12月14日に千葉大学西千葉キャンパスにて行われました。関東地区での開催は2007年の第1回（芝浦工業大学）から数えて7回目となりました。今回は演題数に若干の減少がみられましたが、それでも23題の発表がございました。関東圏以外にも関西と九州からご参加いただきました。研究奨励発表会は、本来、大学生、大学院生の萌芽的な研究に対して発表の機会を与える、若手の登竜門としての位置づけでございますが、大学の教員の立場で申しますと、学生の尻たたきに丁度良いタイミングで開催されるようです。一方で、学生の様子をみておきますと、昨年からはまった京都での夏期セミナーの流れもあり、夏に知り合った他大学の学生と、冬に研究の進捗状況を刺激し合うという大事な機会にもなっているようです。学生の時のネットワークはその後の研究者生活にとっても大事です。将来このネットワークが生かされるとすれば、お世話役冥利につきるというものです。

3年間、お世話役を務めさせていただきましたが、今回は、同じ千葉大学の下村義弘先生にいったんバトンをお渡しします。次回もまたたくさんのご参加お待ちしております。

さて、優秀発表賞は、厳正な審査の結果、次の4演題の発表者に授与されました（順不同）。お

写真をそえてご紹介いたします。

・背部温熱マッサージが前頭前野活動に及ぼす影響、発表者：奥田 拓（千葉大学 環境健康フィールド科学センター）

・集団凝集性の違いが μ 波抑制に及ぼす影響：異なる感覚モダリティによる検討、発表者：富原浩貴（九州大学大学院 統合新領域学府ユーザー感性学専攻）

・風の人体影響に関する衣服衛生学的研究、発表者：永倉由貴，長島佑依果，松田紗織里（実践女子大学 生活科学部）

・幸福表情知覚における無意識下の生理応答、発表者：高橋佳佑，（千葉大学大学院 工学研究科デザイン科学専攻）

受賞されなかった方の演題にもレベルの高い発表は多数ございました。次回の発表会も楽しみでございます。

【第69回学会大会優秀発表受賞者のコメント】

盛況に終わった第69回日本生理人類学会大会（同志社大・福岡義之大会長）では、次の5名の方々が優秀発表賞に選ばれました。

「若年者の睡眠習慣と肥満リスクに関する基礎的研究」

中崎恭子（国立精神・神経医療研究センター）

このたびは、このような栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。大変嬉しく、光栄に思っております。また同時に過大な評価をいただき、身の引き締まる思いです。

今回発表させていただいた研究は、睡眠・食事習慣と肥満がどのように関連するかを明らかにすることを目的としたものでした。最初の段階として若年者のデータから関係性を探りましたが、当初予想したような結果が出ず、栄養学的な視点や過去の研究、解析の仕方など勉強不足な点が多々あることを痛感しました。なんとか結果としてまとめたものの、まだまだ検討すべき点も多く、悩みながらの発表でしたが、当日多くの先生方から今後の研究を進めるにあたり大変有意義な意見をたくさんいただきました。本研究はまだ調査中であり、データをさらに積むことで、より詳細な検討を行っていかれたらと思っております。発表当日頂いたアドバイスを参考にさせていただき、今後も研究に励んでい

きたいと思います。最後になりますが、本研究はご指導いただきました三島和夫先生、北村真吾先生、肥田昌子先生をはじめ、諸先生方、多くの関係者の方々のご協力なくしては形にできておりません。皆様に心より感謝申し上げます。

「身体局所冷却の生理反応の個人差及びその影響要因について」

奥山祐輝（北海道大学大学院）

この度は、名誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。このような学会を企画・運営して下さった先生方、講演を聴いてくださった皆様に厚くお礼申しあげます。また、常日頃よりご指導くださいました前田享史先生に心から感謝を申し上げます。本発表では、「身体局所冷却の生理反応の個人差及びその影響要因について」と題しまして、近年のエネルギー問題や熱中症対策などに寄与すると考えられる技術に対して、人間の視点からその有効性を検討しております。

本発表を行うまでには、分析方法や考察をはじめ、ポスターの構成、発表内容について前田先生から多くのアドバイスをいただいたことは勿論のこと、9月に実施されました、夏季セミナーにも参加させていただき、多くの先生方からの新しい知見やアドバイスを頂けたことが大きな助けとなったと考えております。この場をお借りしてお礼申し上げます。発表に際しては、ポスター前での口頭発表の時間制限から、わかりやすく使えるために要点は何かを常に考え、短い時間でも内容を伝えられるよう発表内容を考え、それに合わせてポスター内容を変更していくなど、最大限の努力を致しました。このような努力を評価していただき、大変うれしく思います。今回の賞を励みに、より一層精進していきたいと考えています。ありがとうございました。

「集団凝集性の違いが共感に関連する脳活動に及ぼす影響」

富原浩貴（九州大学大学院）

この度は優秀発表賞という非常に名誉な賞を賜り誠に光栄です。本研究の遂行に当たって丁寧かつ熱心にご指導頂いたキムヨンキュ先生に心より感謝いたします。また樋口重和先生をはじめとした九州大学の関係者の方々にもこの場

をお借りして御礼申し上げます。

今回受賞した私の研究は、ヒトの他者行為認知の神経学的基盤と考えられるミラーニューロンシステムの活動が行為の社会的要素(他者との関わりあいの程度)の違いによって変化するかを検討したものです。本学会の中でも少し変わったタイプの研究ですので誰にも質問して頂けないのではないかと不安でしたが、実際には質疑応答で有意義なディスカッションが出来ただけでなく、発表終了後にも沢山のコメントや質問をして頂くことができました。それだけでも十分満足していたのですが、さらに優秀発表賞まで頂けることになり、楽しいことばかりではありませんでしたが研究を続けて良かったと心から思いました。

本学会では私が学部4年次の65回大会から数えると幸運にも7回もの発表の機会を頂きました。未熟な点が多かった私の研究ですが、多くの先生方からのご教示を頂けたことが今回の受賞に繋がったのではないかと感じています。最後になりますが、生理人類学会の益々のご発展をお祈りして結びの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

「就寝前記憶課題実施時の照明光が睡眠及び記憶課題成績に与える影響」

高倉潤也（東芝株式会社）

第69回大会優秀発表賞を受賞させていただきました、株式会社東芝研究開発センターの高倉潤也と申します。私自身は、学生時代に第55回大会で優秀発表賞の前身にあたる発表奨励賞もいただいておりますが、企業研究者という異なる立場で再び受賞できたことを大変光栄に思います。もともと、照明や睡眠の研究が専門であったわけではありませんが、社内で照明に関する業務に携わることになり「照明の効果を示す新しい研究を何か考えてみる」というお題を与えられたのが本研究の発端です。照明の効果に関する研究自体は過去に膨大な積み重ねがある中、半ば無理矢理ひねり出した新しい実験テーマではあったのですが、思いがけず良い実験結果が出てしまったというのが正直な感想です。更に実験データを積み重ねた上で、製品にも研究成果を反映させることができると考えております。なお、実験の実施にあたっては、九州大学

の小崎智照先生、小崎研究室の学生の荒田俊彦さん、久保川彩花さんに多大なご協力をいただきました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。また、今後、他の研究テーマでもPANewsをお読みの先生方と共同研究といった形で関わらせて頂く機会があれば幸いです。

「閉所環境が主観評価とP300へ与える影響」

関谷崇寛（九州大学芸術工学部工業設計学科）

この度は、名誉ある賞を賜りまして、大変光栄に存じます。本研究を進めるにあたってご指導いただいた綿貫茂喜先生、同研究室の皆様、そして本研究に参加してくださった皆様はこの場をお借りしてお礼を申させていただきます。

今回賞を頂きました発表は、閉所環境が心理生理値にどのように影響を与えるかを検討したものでした。本研究は、私にとって初めての研究活動で、研究を進めるにあたって自分の知識不足や経験不足を痛感するものでありました。知識・経験不足や機械不良などが重なり、限られた時間の中で実験を完遂することは大変苦労しました。また、他に同様の研究を行っている研究者が少なく、ほとんど一から実験系を組み立てることは至難の連続でした。しかしながら、このような経験は人一倍の経験と知識を蓄える良い機会になったと感じております。研究を始めるにも右も左もわからない状態だった私が、生理人学会という名誉ある場所で発表できたのは周囲の皆様の温かい支えがあったからであると感じております。

まだ研究者としては至らない部分が多いでしょうが、この賞を励みに今後より一層研究に励んでいきたいと思う所存であります。最後となりましたが、このたびこのような賞に選出して下さいました同志社大学福岡義之先生、並びに関係者の皆様、本当にありがとうございます。

【学会動静】

・大会予定

第70回大会 [会期] 2014年春
[会場] 九州大学(福岡県)

第71回大会 [会期] 2014年秋
[会場] 神戸大学(兵庫県)

第72回大会 [会期] 2014年春
[会場] 北海道大学(北海道)

・新入会員の方々（順不同、敬称略）

※ 2013. 11～2014. 1

正) 鈴木ひとみ 神戸常盤大学保健科学部看護学科
学) 奥下竜太郎 東京工業大学大学院総合理工学研究科

正) 弓永久哲 関西医療学園専門学校理学療法学科

学) 鈴木恵子 武蔵野大学人間科学部人間科学科

正) 竹内京子 帝京平成大学ヒューマンケア学部

学) 塚本敏人 立命館大学大学院スポーツ健康科学研究科

from Editors

次号No. 2の原稿締切は2014年4月20日です

▽2014年度も、私、安陪大治郎（九産大）と小崎智照（九州大）が PANews を編集させていただきます。我々編集担当が新たに企画した「私の生理人類学」や「研究室紹介」についても、継続して掲載していく予定です。また、PANews は和文誌と共にデリバリーされているので、学生会員の皆様のお手元には届かないこととなります。このため、出版からできるだけ早く学会 HP に web 版の PANews を載せていきますので、これからもご愛読願います。

▽今号は安河内学会副会長に「若い人にとっての生理人類学」と題してご執筆いただきました。また、堀内雅弘先生には研究室紹介をご寄稿いただき、第69回学会大会優秀発表受賞者の先生方にも受賞のコメントをいただきました。ご寄稿いただきました先生方には、この場を借りて御礼を申し上げます。今後も会員の皆様へ有用な記事を配信したいと思います。今後ともご愛読お願い致します。

「梅一輪 一輪ほどのあたたかさ（服部嵐雪）」。

▽PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

小崎 智照 九州大学 芸術工学研究院

メールアドレス panews@jspa.net

※お問い合わせなどは、上記のメールアドレス宛にお送りください。